

訳者まえがき

本書は Peter S. Fosl and Julian Baggini, *The Philosopher's Toolkit: A Compendium of Philosophical Concepts and Methods*, 3rd edition, WILEY Blackwell, 2020 の翻訳です。原著の初版が刊行されたのが 2003 年。以来、本書は哲学の入門書として好評を博し、増補と改訂を重ねてきました。ここにお届けするのは最新の第 3 版の訳です。

改訂のたびに新たな項目を組み入れてボリュームを増したとはいえ、本書の性格は初版から一貫しています。英米と大陸の双方における展開を視野に入れていること、哲学史についての叙述を豊富に含んでいること、そして懐疑論への強い関心、日本語で読める用語集は他にもあるでしょうが、項目の選定（とりわけ最初の 4 つの章のそれ）において本書は独自の価値をもつと思います。

旧版ではおせっかいを承知で邦語の文献情報を添えましたが、このたびの翻訳では省略しました。代わりに、日本語ではありませんが、本書を補うものとして次の 2 点を挙げておきます。

- ▶ David Papineau, *Philosophical Devices: Proofs, Probabilities, Possibilities, and Sets*, Oxford University Press, 2012.
- ▶ Robert Audi ed., *The Cambridge Dictionary of Philosophy*, 3rd edition, Cambridge University Press, 2015.

前者は、英米系の哲学で、いわば基礎教養として要求される概念に焦点を合わせた入門書。取り上げる材料は本書とも一部重なりますが、扱いはもう少しフォーマルです。後者は便利な事典。インターネットのおかげで調べものが容易になったとはいえ、こういう事典が手元に一冊あると便利です。

他の著作からの引用では、先学の仕事に大いに助けられました。そのまま既訳を使わせていただいた箇所もあります。一部の人名の表記ではあえて慣習を破っていますが、誤解はないでしょう。脚注では、主に邦訳での出典箇所を挙げておきました。解説めいた注も若干ありますが、言わずもがな程度の内容なので、煩わしければ無視してください。

この訳書が成るにあたって、お世話になった方々にお礼を言います。いくつかの項目について相談ののってくれた堀口佳子さん。遅い作業に辛抱強くお付き合いいただいた共立出版編集部在天田友理さん。初版の翻訳に続いて編集の労を取ってくださった石井徹也さん。どうもありがとうございました。

2025 年 5 月

訳者しるす

はじめに

時として、哲学はひどく専門的で複雑な顔を見せることがある。専門用語や手続きは初心者をつまませ、専門家ですら理解に苦労することも珍しくない。外科の手術と同じで、知識の獲得だけでなく、道具を使う精度と技の習得が哲学でも必要とされる。『哲学の工具箱』はそうしたツールを集めたものと思ってもらえばいい。とはいえ、外科医や熟練の木工職人が使う道具とは違い、本書で紹介する道具は概念的なものである。つまり、哲学の概念や論証、ビジョン、学説に触れ、分析し、批判し、評価するツールだ。

本書にはさまざまな用途がある。哲学的な思索の基本について学びたいければ、最初から最後まで通読すればいい。哲学の基礎的方法やクリティカル・シンキングの教科書として使うこともできる。哲学の主要概念や方法の簡明な説明がほしい一般読者や、哲学が専門の読者には、参考図書にもなるはずだ。本書の項目は自然で論理的な順序で配列されているが、アルバム好きな曲を最初に再生するような感覚で、どこから読み始めてもらってもかまわない。要するに、初心者から熟練者まで、幅広い読者が使える概念の工具箱を提供するのが本書の狙いである。あちらこちらのテキストに散らばった、学ぶのに時間がかかるツールがここには集められている。

この第3版では新たに16項目を追加し、既存のほとんどの項目も見直しと改訂をほどこした。構成は旧版のやり方を踏襲して、論証の基本ツールから始まり、いっそう洗練された哲学の概念や原理へと進む。評価のためのさまざまな道具、要となる法則、基本原理、重要な概念的区別を紹介し、最後に哲学的思考の限界について述べる。各章とも、現代哲学が関心を寄せる複雑なテーマへの入り口となるものだ。

本書は、あえて多元論的な構えを採用している。大陸系の哲学と英米系の哲学の伝統をともに尊重するよう努めたという意味だ。西洋哲学におけるこの2つの流れはしばしば対立し、互いを猜疑と軽蔑の目で批判することがたびたびあった。両者が完全な別ものになったことはないが、双方の伝統に寄与した大

物の哲学者は18世紀のイマヌエル・カントが最後だろう。カント以後、大陸の伝統がたどった道は、ドイツとイギリスの観念論、現象学、実存主義、記号論、構造主義を経由し、さまざまな趣向のポスト構造主義へと至り、時に文芸批評とも交差する道だった。一方、英米系の哲学は、経験主義に始まり、功利主義、実証主義を経て、プラグマティズムと分析哲学へと進んでいった。本書は、いずれの伝統にも価値があると認め、その両方に学ぶことが哲学に対するもっとも真摯で実り多いアプローチだとする立場にたっている。

本書の7つの章は、それぞれが簡潔な項目で構成されている。各項目は、ツールの解説とその使用例、ツールの適用範囲と限界についてのガイダンスを含んでいる。また、それぞれの項目が他のどの項目と関連があるかも示してある。項目どうしの関連は自明のものが多く、ときおり紹介した意外なつながりも読者の理解を深めてくれるはずだ。参照項目や読書案内の情報をたどりながら、興味に応じて本書を利用してもらえればと思う。

読書案内には、ある程度の知識のある読者が知っておくべき近年の重要な文献や、歴史上の重要文献が含まれている。しかし、初学者向けに詳しく説明した入門書も紹介しておいた。さらに、トピックの重要性を示す文献も入れてある。

彫刻の名匠になるには、道具を手にとって使う能力だけでは足りない。才能や想像力、練習、忍耐、そして時には勇気も必要だ。哲学も同じで、道具が使えるようになったからといって、初学者が一夜にして哲人になれるわけではない。それでも道具への習熟は、読者にさまざまなスキルと能力とテクニックをもたらし、より良く哲学するための助けになるに違いない。それはまた著者の願いでもある。

謝 辞

本書の構想段階でニコラス・ファーンにお世話になった。彼の影響は本書のいたるところに残されている。ワイリー・ブラックウェル社のジェフ・ディーンには、単なる妙案どまりのアイデアを本のかたちにまで育ててもらった。著者としては、それが成功したことを願うばかりだ。項目の編成で協力いただいたリック・オニール、ジャック・ファーロン、エレン・コックス、マーク・モアマン、ランドール・オクシエ、ブラッドリー・モントン、エイヴリー・コラーズ、トム・フリン、ソール・クトウニツキ。本文を入念に点検してくれた校閲担当の匿名氏。校正の手をわずらわせたピーターの秘書アン・克蘭フィルと多くの同僚たち。科学方面のチェックを快く引き受けてくれたピーターの職場仲間、化学が専門のロバート・ローゼンバーグ。綿密な編集作業で助力してくれたワイリー社のマニッシュ・ルトラ、マリッサ・コアス、リズ・ウィングット、ダニエル・フィンチ、レイチェル・グリーンバーグ、アネータ・アントニー、キャロライン・マクファーソン。意見を寄せてくれたピーターの学生たちと、訂正や修正案を送ってくれた読者の方々にもお礼を言いたい。そして、本書の執筆のあいだ辛抱強く支えてくれたピーターの妻と子どもたち、キャサリン・フォスル、アイザック・フォスル＝ヴァン・ワイク、イライジャ・フォスルと、ジュリアンのパートナーのアントニアに、変わらぬ感謝の気持ちを込めて、ありがとうの言葉を贈る。